

# エメ・アンベールが見た幕末期の江戸における 武士の武術稽古について

谷 釜 尋 徳<sup>1)</sup>

Martial arts training for samurai in Edo as the end of the shogunate as observed by  
Aimé Humbert-Droz

TANIGAMA Hironori

## Summary

Aimé Humbert-Droz visited Japan at the end of the shogunate as leader of a Swiss diplomatic mission. Drawing on his personal accounts, the current work discusses martial arts training for samurai in Edo from 1863-1864.

An overview of this work is as follows.

1. In his personal accounts, Humbert-Droz described many of his impressions of swordsmanship training for samurai. The conduct of swordsmanship training in the late modern period, when armor was developed, can be gleaned from Humbert-Droz's descriptions. The records of swordsmanship matches among samurai that he observed are a valuable account from the objective perspective of a foreigner. Moreover, an illustration featured in his book depicts a samurai training, using the confines of a shrine as a dojo.
2. Humbert-Droz observed horsemanship training by samurai, and he recorded details down to the samurai's posture on horseback. Adeptly perceiving trends in the city of Edo, he recounted the spectacle of feats of horsemanship (akin to a Western circus) being performed in the city of Edo. He even described a horsemanship training facility for the samurai caste. He seemed particularly surprised that horsemanship training by samurai was being conducted in a place where commoners were present.
3. Humbert-Droz observed a woman training with a naginata (a bladed pole). That training was conducted in private, so Humbert-Droz was unable to observe the woman's actions in detail, but his personal accounts are a valuable attestation depicting some of the unknown sports for women in Edo.
4. Humbert-Droz's personal accounts should be viewed as an indication of actual circumstances compared to Japanese historical materials. Moreover, Humbert-Droz's observations extended to use of weaponry and customs unique to samurai; he objectively captured events that were unrecorded by Japanese since they were considered commonplace. Humbert-Droz's thirst for knowledge is noteworthy; he observed martial arts training for samurai firsthand, and he accurately described a foreign culture.

---

1) 東洋大学スポーツ健康科学（白山キャンパス）研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20  
Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

## 1. はじめに

日本のスポーツ史上、人口の大半を占める庶民層が、武士や貴族を押しつけて身体運動を伴う遊戯（スポーツ）の中心的な担い手になったのが近世という時代である。特に近世後期になると、経済力を手にした都市の商工人が余暇の消費手段としてスポーツに身を投じるようになった。

この頃、100万の人口を抱える世界的な大都市となった江戸では、多様なスポーツが日常的に楽しまれていた<sup>1)</sup>。「する」スポーツから「みる」スポーツに至るまで、老若男女の庶民や武士がスポーツに熱中していた事実がある。

明治維新を迎え、極東に位置する日本も西洋と同じ時間を共有するようになると、数量的な合理主義によって編み上げられた近代スポーツの波が、日本にも本格的に到達する。その近代スポーツの受容と発展の歴史は、多くの日本の研究者を虜にしてきた。

しかしながら、近代以前の日本のスポーツ史を解明しようとする試みは活発化していない<sup>2)</sup>。それは、近代以前の日本のスポーツに関して、日本人の手によって記された史料が不足していることも関係している。人々の日常のすぐ側にあったスポーツについて、当時の日本人が意識的に記録することは稀だったのであろうか。

しかし、日本人にとっては取るに足らないことでも、異文化からやってきた訪日外国人の目には、特筆すべきものとして映るケースもある。特に、幕末～明治初期に来日した西洋人の見聞録を紐解いてみると、彼らは西洋化以前の日本人の生活実態をつぶさに観察していた<sup>3)</sup>。

見聞録の中には、スポーツに関する観察記録が見られる。例えば、嘉永6（1853）年と安政元（1854）年のペリー来航に随行したドイツ人画家のハイネは、日本人の遊戯の特徴を、「球戯、凧

揚げ、的あての弓矢遊び、花札も好きである。」<sup>4)</sup>と記し、多様なスポーツの存在を指摘している。

ヨーロッパとの比較において日本のスポーツを眺めたのが、安政5（1859）～文久2（1862）年にかけて来日したイギリス人外交官のオールコックであった。オールコックは、「日本人は、あらゆる年齢の人物のための多くの遊戯をもっている。子供のための遊戯（すくなくともその多く）は、ヨーロッパの遊戯に似ている。輪回しも見たことがあるし、凧あげは大変よく行なわれているし、その他羽根つき・竹馬・球戯・大きな雪の球の遊びもある。」<sup>5)</sup>と記述している。

また、彼は「わたしの考えでは、日本人にかんしても、かれらの娯楽とその楽しみ方を見れば一般の趣味と国民性がかなりよくわかる。」<sup>6)</sup>とも述べた。オールコックがいう「娯楽」の中には、身体運動をとまなうスポーツも含まれていたため、彼はスポーツのあり様から日本人の国民性を感じ取ろうと努めていたことになる。

このようにして、訪日外国人の見聞録によって史料的な限界を補い、日本の史料と比較検討することで、より客観的な側面から近世日本のスポーツの実際に迫ることが可能になる。そこで本稿では、幕末～明治初期に訪日した外国人の見聞録を貴重な時代の証言として、近世日本のスポーツ史の再構成を試みたい。

訪日外国人の見聞録を史料として歴史叙述を試みた代表的な研究が、渡辺京二の『逝きし世の面影』<sup>7)</sup>である。渡辺は、西洋からやってきた多くの外国人の日記を読み解き、幕末期～明治初期の日本事情を詳らかにした。渡辺の視点は、近代化以前の日本を西洋化によって滅亡した「逝きし世」だと捉えたところに特徴があった。

一方、渡辺の仕事を高く評価しながらも、近代化前後の日本の文明に連続性を見出す史観に立脚した論集が竹内誠監修の『外国人が見た近世日

本』<sup>8)</sup>であろう。本書は山本博文、大石学、磯田道史、岩下哲典といった近世史家が著者に名を連ね、訪日外国人の見聞録をもとにそれぞれの視点から日本の近世史を切り取っている。ほかにも、関連の研究として、吉崎雅規の『幕末江戸と外国人』<sup>9)</sup>、石川榮吉の『欧米人の見た開国期日本』<sup>10)</sup>、森田健司の『外国人が見た幕末・明治の日本』<sup>11)</sup>などを挙げることができる。

ところが、従前の近代以前を対象としたスポーツ史研究において、訪日外国人の記述が部分的に参照されることはあっても、その史料群を中心に近世日本のスポーツ史を描いた試みは、極めて少ない。猪木武徳<sup>12)</sup>や谷釜尋徳<sup>13)</sup>の論稿では、訪日外国人の見聞録を用いて近世の遊戯や運動に係る分析が試みられているが、対象となるスポーツ現象は限定的であった。当該史料を用いたスポーツ史研究には、今後の進展の余地が大いに残されていると言えそうである。

本稿では、一人の訪日外国人を取り上げ、その見聞録から幕末期のスポーツ現象の一端を浮かび上がらせてみたい。対象とする人物は、エメ・アンベールである。アンベールはスイス人の外交官で、幕末の文久3（1863）年に「特使及び全権公使」として来日し、翌文久4（1864）年に日瑞修好通商条約を調印した。この期間の見聞を『日本図絵』<sup>14)</sup>（原題：Le Japon illustré）というイラスト入りの書物にまとめている<sup>15)</sup>。

アンベールが見た日本人のスポーツは実に多様で、彼は示唆に富む見解を多く残しているが、本稿では武家の事情に着目することにした。訪日外国人の見聞録の中でも、武士のスポーツを書き記した例は稀だからである。アンベールは独自の視点をもって、男性の武士による剣術および馬術の稽古、そして武家女性の武術稽古の見聞を残している。

泰平の世の到来により戦乱から遠ざかると、武

器を用いながら、しかも人を殺すことなく勝敗を争う方法が創案される<sup>16)</sup>。これに伴い、武士の殺法としての兵法は、一定の規格・規則の範囲内で安全に技を比べる競技化の道を歩みはじめた。宮本武蔵の『五輪書』にも「当世におゐては、弓は申に及ばず、諸芸花多くして実すくなし。さやうの芸能は、肝要の時、役に立がたし。」<sup>17)</sup>と記され、本書が執筆された17世紀半ば頃には諸々の武術がすでに実戦には向かない「芸能」となっていた模様が見て取れる。

外国人が頻繁に日本に來航するようになった幕末期には、欧米列強という外圧による緊張感があつたとはいえ、武士の嗜みとしての武術は稽古事として行われていた。アンベールは、「およそ、武士はすべて、ごく幼いころから毎日、肉弾戦や、槍、太刀、劍、短刀を振るっての闘いを練習する。現に、われわれが通っている地区にも、子弟のために、ここだけでも二カ所の馬場と、馬術や、劍道の稽古用のいくつかの建物がある。」<sup>18)</sup>との見聞を記録している。彼は、武士が幼少の頃から武術に励んでいることや、その稽古のために江戸には馬場や道場があることを知っていたのである。

ところで、訪日外国人の見聞録を史料として取り扱う場合、留意点も存在する。彼ら外国人が比較対象として扱ったのは、自国の文化である。したがって、「自分たちの文化を物指しにして相手を測る」<sup>19)</sup>という手法で見聞録が記述されているパターンが多い。また、磯田は、「『外国人の見た日本』という場合、『外国人』の中身は、圧倒的に『欧米人』となる点である。記録を残しているのが、ほとんど近代化をなしとげた欧米人であるため、欧米人の価値観でのみ、当時の日本人をながめることになってしまう。」<sup>20)</sup>と指摘する。

さらには、訪日外国人によって語られるスポー

ツ現象は、彼らの目の及ぶ範囲に自ずと限定される。スイス領事リンダウの見聞録を翻訳した富田仁は、「多くの来日西洋人は国内旅行の制限もあるためにきわめて限られた行動半径での見聞と情報によって日本ないし日本人論を構築していった」<sup>21)</sup>と指摘する。したがって、本稿における対象地域は、アンベールが出歩いた江戸市中の範囲に集約され、彼の眼に留まらなかったスポーツ現象は、本稿では扱われないことになる。同様に、時代の設定もアンベールが訪日した時期に限定される。

従来、アンベールにまつわる研究は数多く存在するものの<sup>22)</sup>、アンベールが見聞したスポーツに着目した研究は見当たらない。

以上より、本稿では、文久3（1863）～文久4（1864）年にエメ・アンベールが見聞した江戸の出来事のうち、武士の武術稽古を取り上げて考察を加えるものである。

## 2. 剣術

アンベールが多くの印象を書き残したのが、武士の剣術稽古についてである。彼の眼は、江戸の武士が熱心に剣術に打ち込む姿を捉えていた。以下にアンベールの見聞を引いておきたい。

「われわれは、弟子たちを連れ、小使たちをお供にした剣道の師範が通って行くのを見た。槍、木刀、手袋〔籠手—訳者注〕、面、胸当て〔銅—訳者注〕などを持って行くのは小使であった。こういう道具などは、ドイツの各大学のフェンシングの道場で用いるものを思い出させる。弟子たちは、稽古で体が熱くなっている。肩に絹の外套〔上下（かみしも）—訳者注〕をかけ、胴着の胸をはだけている。元気よく、誇らしげだが、黙々と、まことに行儀よく、愉快そうに歩いて行く。』<sup>23)</sup>

アンベールが見た剣術師範は、使いの者に槍、木刀、手袋（籠手）、面、胸当て（銅）を持たせていた。流派は定かではないが、防具が発達した近世後期の剣術稽古の様相をうかがい知ることができる。

また、以下に引用するように、この道場の中には、稽古に参加しないにも関わらず防具を身につけた上級武士がいて、彼はこれを「威厳をつけるため」だと理解した。このあたりは、武家社会の事情が垣間見えて面白い。籠手を脱いだ後に刀を差して歩く上級武士の姿は、滑稽に映ったようである。

「一人の上級武士が、ただ単に見物していただけたのだが、威厳をつけるために、勝風通しのよくない稽古着をきちんと着けていたが、稽古が終ってからは、肘まで達していた白い籠手をもうはずしてもさしつかえがなくなったので、それを脱いで、二本の刀を柄にぶら下げた。われわれには、その組合せが滑稽でまるで歩く人形 mannequin のようであったが、当人はいっこの気にもしていない様子であった。』<sup>24)</sup>

以下に引用する武士の剣術試合の記録は、大変興味深い。日本人にとっては通常の試合の流れであっても、西洋人である彼の眼にかかれれば実に客観的な観戦記となる。礼をしてから試合がはじまるのは現在と相違ない。守勢に回った側が「片膝をついて」相手の攻撃をかわすという動きは少々違和感を覚えるが、当時用いられていたテクニクだった可能性もあろう。「一撃ごとに芝居がかった見得を切り」という表現は、一進一退の攻防を実に巧みに言い当てている。

「私はいくたびも、役人たちの剣道の試合に出席したことがある。試合を始める前に、たがい

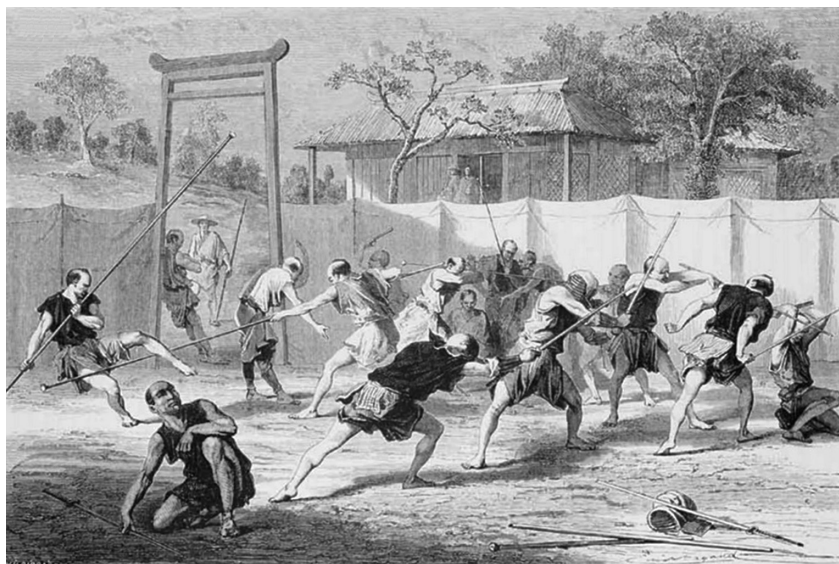


図1 アンペールの著作に掲載された江戸の剣術道場  
Aimé Humbert, *Le Japon illustré* (t.1), Libr. de L. Hachette, 1870, p. 345

にお辞儀する。守勢に回った方は、いっそうよく切り結ぶため片膝をついて、相手の攻撃をうまく避ける。一撃ごとに芝居がかった見得を切り、表情たっぷりで、打ち合うたびに、双方が勢い込んで掛声をかける。やがて、審判が中に立ってその試合を終らせ、大げさな口調で勝負を判定する。それから、休憩となり、一杯のお茶がくばられ、またさらに、白熱した試合が再開される順となるのである。』<sup>25)</sup>

なお、アンペールの著作には武士が道場で稽古に励む様子を描いた挿絵が掲載されている（図1）。この道場は屋外で、鳥居が描かれていることから、神社の境内であろうか。参加者は、何組もが入り乱れて1対1の打ち込み稽古を実施している。防具に身を包んで剣術の稽古をする者もいれば、防具をつけずに棒術の稽古に励む者もいたようである。

実際に、すでに幕末期の江戸では剣術稽古用の防具が用いられていた。剣術の防具は、直心影流の長沼国郷が改良を加え、籠手、面、胴を備えた

形式が完成したという。防具の登場によって、『北斎漫画』に描かれたような実戦さながらの立ち合い稽古が可能になった（図2）。

図3は同じく『北斎漫画』の一枚で、剣術に用いられた竹刀や防具である。描かれた面、籠手、胴を見ると、今日の剣道と同じような防具がこの時代に存在していたことがわかる。北斎がイラストに添えた説明書きによると、竹刀の鍔は牛の革製、籠手は革製、胴は竹製、面は正面の金具以外は布製だったという。

こうして照らし合わせると、アンペールが当時の剣術稽古の模様をかなり忠実に書き取っていたことがわかる。近世後期の江戸には数多くの剣術道場があり、そこでは武士のみならず庶民層も稽古で汗を流すなど、道場経営がスポーツ教育産業の素材として確立されていたという<sup>26)</sup>。天保14（1843）年6月には、「市人ら武技稽古の事聞ゆるによてその師、に市人に教授すまじと令せらる。』<sup>27)</sup>との触れが出され、庶民の道場通いに規制がかけられている。したがって、アンペールが見た剣術に励む日本人の中には、武士に紛れて庶民

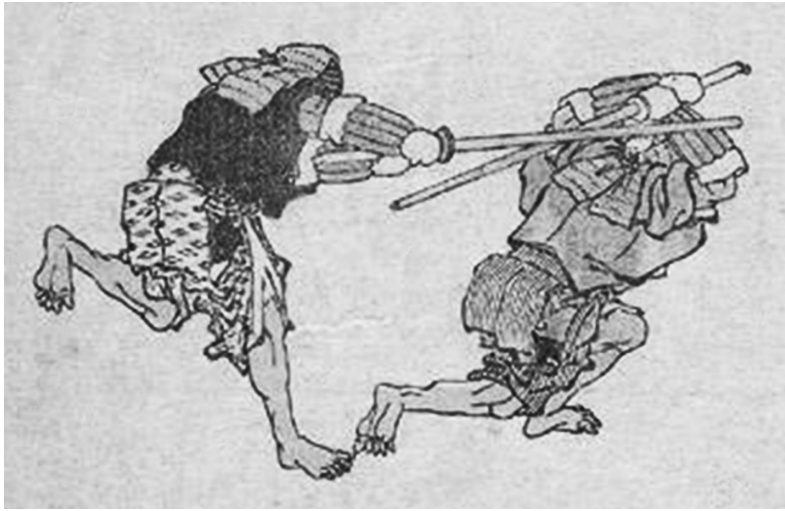


図2 『北斎漫画』に描かれた竹刀打ち込み稽古の様子  
葛飾北斎「北斎漫画 六編」『初摺 北斎漫画 (全)』小学館, 2005, p. 355

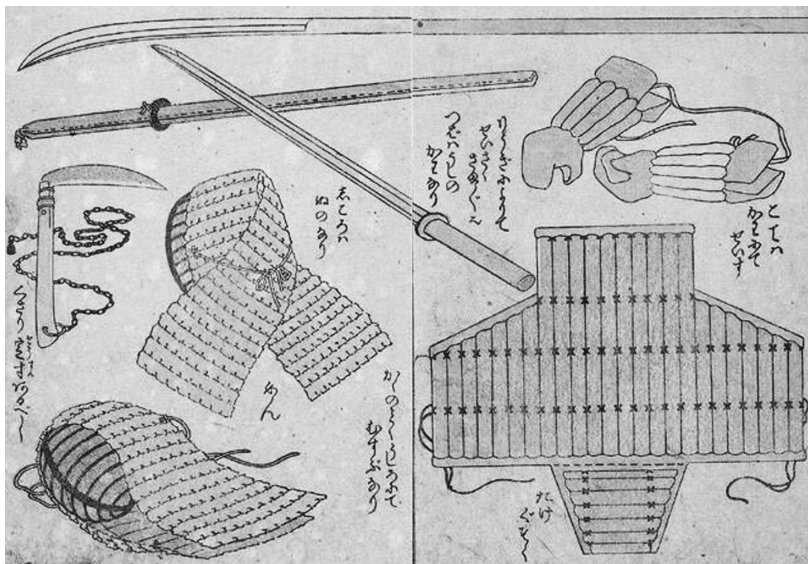


図3 『北斎漫画』に描かれた剣術の道具  
葛飾北斎「北斎漫画 六編」『初摺 北斎漫画 (全)』小学館, 2005, pp. 340-341

層が存在していた可能性もある。

### 3. 馬術

アンバーは、「江戸には競馬クラブ jockey club [十九世紀イギリスに発祥し、ヨーロッパで盛んだった貴族の社交団体—訳者注] もなければ、いわゆる競馬というものもなく、イギリス崇

拝 *anglomanie* といった所はまったく見られない。」<sup>28)</sup>と指摘したうえで、武士の馬術訓練の見聞を「役人は、ただ単に馬術練習で馬を乗りこなすのに精いっぱいなのである。役人は鞍にかじりつき、頭を下げ、胸の所で小さな馬の手綱を両手で握りしめている」<sup>29)</sup>と記録している。騎乗する武士のフォームまでを捉えた、実に詳細な一文であ



図4 リズリー一座による横浜の曲馬の図  
玉桜芳年『横浜異人曲馬』藤慶，1864

る。

続けて、アンバールは次のように記す。

「こんな役人の姿を見て、民衆は彼らを称賛するというより、彼らに同情している。したがって、人々は市場〔縁日一記者注〕で催される曲芸小屋の見世物の方にひかれるのである。そこでは、玄人の乗り手が仕込んだ馬に鞍も付けずに乗り、ありとあらゆる軽業、曲乗り、早業を披露する。」<sup>30)</sup>

江戸の庶民が武士に同情しているかどうかはともかく、アンバールは江戸市中で興行が打たれていた曲馬という見世物の存在に気が付いていた。

実際、アンバールの滞在期間中にも、曲馬の見世物が大流行りした。元治元（1864）年3月、アメリカ人のリズリーは10人の座員と8頭の馬を引

き連れて横浜に来航する。開国以来はじめての外国曲馬団となるリズリーの一座は、乗馬術のほか体操演技、鉄棒、玉乗りなど数々の妙技を披露したという<sup>31)</sup>。日本サーカス史の幕開けである。

アンバールがこの興行の話題を聞きつけていたのかどうか定かではないが、江戸の流行を敏感に察知していたことは容易に想像がつく。

アンバールの記述は、武士階級による馬術訓練場（馬場）の存在にまで及んでいた。

「北方の区域に住む侍のために、馬場や弓技場〔弓の練習所一記者注〕があるのは湖の下流地帯である。このような馬術練習場や娯楽場は一般民衆には近づけないものなのだが、それでも、下町に住む者の中に武家階級のいることは興味がある、と特筆しておく価値がある。

娯楽場〔馬場、弓技場等一記者注〕の中には、上級武士のみに限るものもあるが、幕府直参の旗本、御家人以外には入れないものもある。直参だけに制限してあるのは馬喰町馬場 Bagirogio-Baba〔現在の中央区馬喰町1～4丁目一記者注〕である。これは野天で、庶民の目に晒されている。この近くには、手軽な料理店があつて、旗本たちの馬術の合間や、終ってからの酒食の注文に応じて出前をする。」<sup>32)</sup>

馬場の場内は武士階級以外は入場禁止だったものの、庶民の目に触れるエリアに設置されていた。武士の馬術稽古が庶民と交わる地域内で実施されていたことは、彼の眼を驚かせたようである。馬喰町の馬場の周辺には武士を相手取った飲食店が軒を連ね「出前」に応じていたという。江戸市中においては、武士と庶民は生活エリアを共有し、共存していたことがわかる。

江戸市中には複数の馬場があつて、武士が馬術の腕を磨いていた。図5は、『江戸名所図会』の



図5 『江戸名所図会』に描かれた江戸馬喰町の馬場  
斎藤月岑編『江戸名所図会 卷七』1836, 須原屋佐助(国立国会図書館蔵)

うち「馬喰町馬場」と題した一枚である。櫓の奥に広がる長方形の空間に馬場が描かれている。馬場の周囲には人々が行き交う様子があり、アンベールがいうように、馬場が庶民の生活圏に一定の面積を占有して収まっている様子が見て取れる。同書において、「馬喰町三丁目の西北の裏通りまわり 江戸馬場の中最も古く」<sup>33)</sup>と解説されているように、ここは江戸で最古の伝統的な馬場だった。

図6は『江戸名所図会』に掲載された上空から見た馬喰町馬場周辺の地図である。この古地図からも、人々の生活圏内に馬場が設置されていた様子がわかる。アンベールの見聞は、事実を正確に捉えていた可能性が高い。

#### 4. 女性の武術稽古

アンベールの眼差しは、武術に励む女性の姿も捉えていた。「日本では、貴婦人のための剣術もある。その武器は刃の湾曲した槍〔薙刀(なぎな

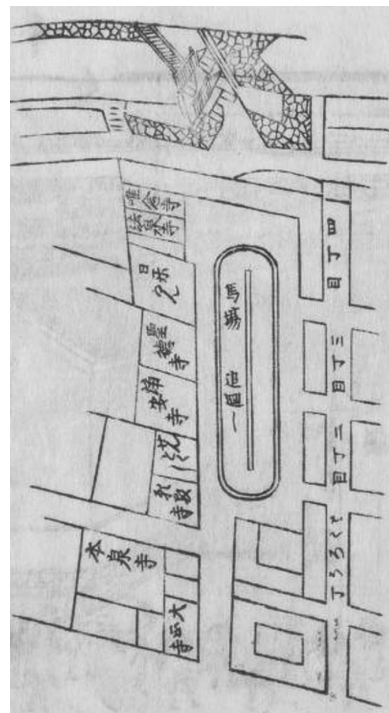


図6 『江戸名所図会』に描かれた江戸馬喰町の馬場の鳥観図  
斎藤月岑編『江戸名所図会 卷七』1836, 須原屋佐助(国立国会図書館蔵)



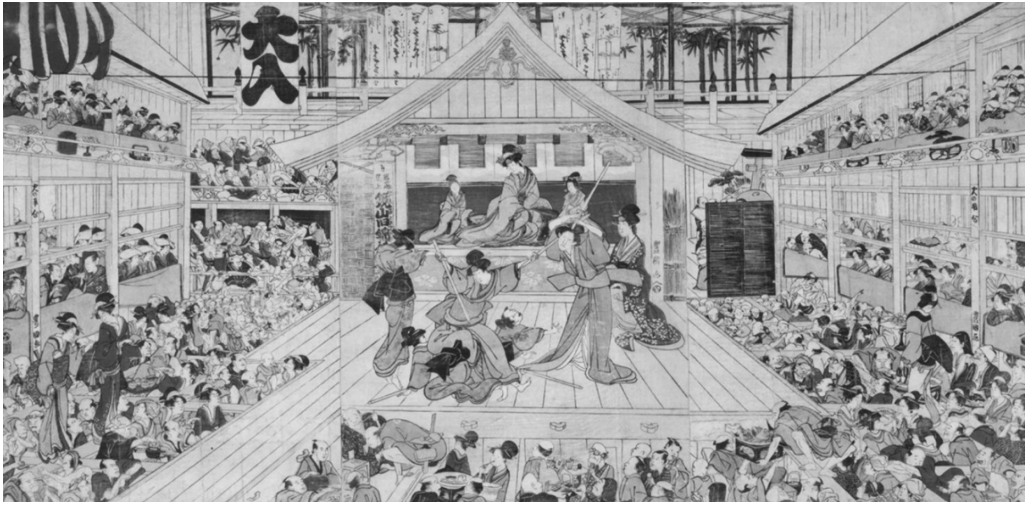


図7 歌舞伎演目「鏡山旧錦絵」を描いた図  
歌川豊国『鏡山旧錦絵』1793 (Online Collection of Brooklyn Museum)

た)一訳者注]で、ポーランドの草刈鎌によく似ている。』<sup>34)</sup>と述べているように、薙刀の稽古を指しているようである。

しかし、アンバールはこの女性の稽古姿をじっくりと観察することはできなかった。下記に引くように、女性の武術とは人目を避けて行う慣わしだったようである。

「私が半開きになっている邸内の前を通りすかりに、かいま見た、優雅な場面を長く眺めているわけにはゆかなかった。役人が、『日本では、婦人が武芸を励んでいるところを、よそのお方にお見せするわけにはまいりません』といながら、扉を閉めてしまったからである。』<sup>35)</sup>

詳細な見聞録が記せなかったとはいえ、そのような「秘め事」にアンバールが遭遇したことは、知られざる江戸の女性像を書き残したという点で大きな意味を持つ。

また、アンバールは、人伝に江戸の女性が「絹の長い紐で、手首に結んだ小さい刃〔鎖鎌一訳者注〕をまことに巧妙に使うとのことであるが、こ

の武器は敵の首に投げかけて、すかさず紐を力をこめて引いて斬る。』<sup>36)</sup>との情報を入手したようであるが、その真意のほどは定かではない。

武家女性の間で武術が盛んに嗜まれていた可能性については、近世より続く歌舞伎の演目に手掛かりを見出すことができる。

図7は初代歌川豊国が描いた『鏡山旧錦絵』という浮世絵で、実際の風景ではなく、イメージ図としての見立絵だったとされる。この演目に登場するお初は剣術の腕前が高く、一途さと気の強さを感じさせる役柄である。描かれた「竹刀打」の場面では、自らが仕える尾上に代わって、局の岩藤との剣術試合に挑み、見事な剣術で岩藤たちを次々と竹刀で打ちのめすという演出だった<sup>37)</sup>。もちろん、歌舞伎の演目がすべて現実世界の出来事を反映しているわけではないが、武家の女性が何らかの形で武術稽古をする場面があった可能性を想起させるものである。

先のアンバールの記述は、江戸の「女性スポーツ」の一端を描写した貴重な見解として捉えることができよう。

## 5. おわりに

本稿では、エメ・アンベールの見聞録を手掛かりに、幕末期の江戸における武士の武術稽古の様相を記述してきた。

アンベールの見聞録は、日本側の史料と比較検討してみても実情を反映していると考えてよい。そればかりか、アンベールの観察眼は用具の使い方や武士ならではの慣習にまでおよび、日本人が当然の出来事として記録に残してこなかった事象も客観的な視点から書き残していた。

武家女性による武術稽古の描写も、目を見張るものがある。女性のスポーツシーンが今日よりも記録に残り難かった時代にあって、「秘め事」にも貪欲に切り込んで行くアンベールの知識欲は特筆すべきであろう。

本稿の内容は、アンベールが目あたりにした、あるいは噂を聞きつけた武術稽古の情報のうち、彼が『日本図絵』に書き記したものに過ぎない。ほかにも、近世の武士は各種の武術やボールゲーム、魚釣りなど、多様なスポーツに興じていたことを忘れてはならない。

なお、アンベールは武士のスポーツ事情のみならず、江戸庶民の相撲、行楽、祭礼、見世物など、幅広い視点から関連の見聞録を書き残しているので、この点の分析は別稿を期したい。

### 〔付記〕

本稿は、JSPS 科研費 JP21K11374 基盤研究 (C) 「訪日外国人が見た近世日本のスポーツ—幕末～明治初期の見聞録を中心に—」(研究代表者: 谷釜尋徳) の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

### <注記および引用・参考文献>

- 1) 谷釜尋徳「江戸のスポーツ」『江戸のスポーツ歴史事典』柏書房, 2020, pp. 6-44
- 2) 近世のスポーツを概説したものとして、例えば下記の結果が挙げられる。

東京教育大学体育学部体育史研究室『図説世界体育史』新思潮社, 1964/岸野雄三「日本近世のレクリエーション」『レクリエーションの文化史』不昧堂出版, 1972, pp. 135-148/樋口智之『特別展図録 競う! 江戸時代のスポーツ』仙台市博物館, 2001/谷釜尋徳「近世における江戸庶民のスポーツに関する一考察」『東洋法学』62巻3号, 2019, pp. 355-373/江戸東京博物館『特別展図録 江戸のスポーツと東京オリンピック』江戸東京博物館, 2019, など

また、渡辺の蹴鞠史研究は特筆すべきものがある。渡辺融「蹴鞠の展開についての一考察」『東京大学教養学部 体育学紀要』3号, 1966, pp. 13-18/渡辺融「懸りの木に関するスポーツ史的考察」『スポーツ史研究』3号, 1990, pp. 1-13/渡辺融「蹴鞠 技術と雅心の融合」『ボール 球体的快楽』INAX, 1991, pp. 34-35/渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究』東京大学出版会, 1994/渡辺融「近世蹴鞠道飛鳥井家の一年」『放送大学研究年報』17号, 1999, pp. 77-96, など

谷釜の下記の著作は、江戸のスポーツ文化に関する比較的詳しい情報を提供するものである。谷釜尋徳『歩く江戸の旅人たち』晃洋書房, 2020/谷釜尋徳『江戸のスポーツ歴史事典』柏書房, 2020/谷釜尋徳『ボールと日本人』晃洋書房, 2021/谷釜尋徳「江戸のスポーツ産業に関する研究—近世日本のスポーツ産業史研究序説—」『スポーツ産業学研究』31巻3号, 2021, pp. 361-374

- 3) 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社, 2005, pp. 18-19
- 4) ハイネ「世界周航日本への旅」, 中井晶夫訳『ハイネ世界周航日本への旅』雄松堂出版, 1983, p. 234
- 5) オールコック「大君の都」山口光朔訳『大君の都—幕末日本滞在記(下)—』岩波書店, 1962, p. 225
- 6) オールコック「大君の都」山口光朔訳『大君の都—幕末日本滞在記(下)—』岩波書店, 1962, p. 220
- 7) 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社, 2005  
同書の初版は、葦書房より1998年に刊行されている。
- 8) 竹内誠監修『外国人が見た近世日本—日本人再発見—』角川学芸出版, 2009
- 9) 吉崎雅規『幕末江戸と外国人』同成社, 2000
- 10) 石川榮吉『欧米人の見た開国期日本—異文化としての庶民生活—』風響社, 2008
- 11) 森田健司『外国人が見た幕末・明治の日本』彩図社, 2016
- 12) 猪木武徳『遊び 異邦人のまなざし 第5輯』国際日本文化研究センター, 2007
- 13) 谷釜尋徳『歩く江戸の旅人たち』晃洋書房, 2020, pp. 43-76/谷釜尋徳『ボールと日本人』晃洋書房, 2021, pp. 106-146
- 14) アンベールの著作の邦訳は複数存在するが、本稿では高橋邦太郎訳の『アンベール 幕末日本図絵 上・下』(雄松堂出版, 1969)を底本とした。
- 15) アンベールの『日本図絵』に記載されたイラストは、絵画史料としての価値は高いものの、日本の名

- 所図会、画集、浮世絵を「下敷き」にして写生画風に仕上げているケースもある（岡田章雄「アンペール『日本図誌』について」『浮世絵芸術』20号、1969、pp.15-19）。このことは、アンペール本人が序文にて書き記したことであった（アンペール『日本図絵』高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、p.5）。そのため、アンペールの見聞録に添えられたイラストの取り扱いには留意する必要がある。
- 16) 西山松之助「近世芸道思想の特質とその展開」『近世芸道論』岩波書店、1972、p.600
  - 17) 宮本武蔵「五輪書」渡辺一郎校注『近世芸道論』岩波書店、1972、pp.362-363
  - 18) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、p.297
  - 19) 石川榮吉『欧米人の見た開国期日本—異文化としての庶民生活—』風響社、2008、p.221
  - 20) 磯田道史「十九世紀の日本人」『外国人が見た近世日本—日本人再発見—』角川学芸出版、2009、p.223
  - 21) 富田仁「はしがき」リンダウ著・森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』新人物往来社、1986、p.14
  - 22) 茂森唯士「著者エメ・アンペール氏と日本」『幕末日本—異邦人の絵と記録に見る—』東都書房、1966、pp.5-12／高橋邦太郎「解説」『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、pp.395-400／岡田章雄「アンペール『日本図誌』について」『浮世絵芸術』20号、1969、pp.15-19／沓沢宣賢「アンペール『幕末日本図絵』所収の絵画と古写真との関係について—『甦る幕末』所収のベアトの写真との対照を中心に—」『日蘭学会会誌』22巻2号、1998、pp.71-86／吉田隆「研究の周辺 エメ・アンペール『幕末日本図絵』とその周辺」『神奈川大学評論』55号、2006、pp.129-134／鈴木章生「アンペールが見た江戸の風景—「三井越後屋」をめぐるクレボン模写図と『江戸名所図会』の挿絵の比較—」『旅の文化研究所研究報告』17号、2009、pp.63-74
  - 23) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、pp.297-298
  - 24) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、p.298
  - 25) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、p.298
  - 26) 谷釜尋徳「江戸のスポーツ産業に関する研究—近世日本のスポーツ産業史研究序説—」『スポーツ産業学研究』31巻3号、2021、p.368
  - 27) 「慎徳院殿御実紀」『続徳川実紀 第参篇』経済雑誌社、1906、p.320
  - 28) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵下』雄松堂出版、1969、p.190
  - 29) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵下』雄松堂出版、1969、p.190
  - 30) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵下』雄松堂出版、1969、p.190
  - 31) 谷釜尋徳『江戸のスポーツ歴史事典』柏書房、2020、pp.86-87
  - 32) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵下』雄松堂出版、1969、pp.188-189
  - 33) 斎藤月峯編『江戸名所図会 巻七』須原屋佐助、1836
  - 34) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、pp.298-299
  - 35) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、pp.298-299
  - 36) アンペール「日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵上』雄松堂出版、1969、pp.298-299
  - 37) 菊池明「加賀見山旧錦絵」服部幸雄・富田鉄之助・廣末保編『新版 歌舞伎事典』平凡社、2011、p.106